

医療・福祉における芸術療法プロジェクト

沖野 成紀^{*1}・磯部 二郎^{*1}・近藤 真由^{*2}・堀 真奈美^{*3}・渡辺 哲生^{*4}

はじめに

「医療・福祉における芸術療法」プロジェクトは¹⁾、SOHUM 計画当初からあったプロジェクトの1つであるが、直接の前身プロジェクトがなかったため開講まで慎重を期し、ようやく2011年度秋学期にその1回目の「人間学1」を開講した。担当教員には、計画当初からのリーダー、沖野、リーダー代行の磯部、音楽療法が専門の近藤（以上音楽学課程）の他、他学科他課程からは、写真が専門の渡辺（デザイン学課程）、医療制度が専門の堀（社会環境課程）が加わり、さらには箱庭療法が専門の1つである体育学部吉川政夫（現）名誉教授にも、2015年度まで箱庭の実習授業を1コマお願いした。

これを受け、「人間学2」は、2012年度の夏期集中授業として初めて開講された。履修者はたった1人であったが、翌2013年度は4名の学生が履修してくれ、まずまずの滑り出しと思われた。ところが、2014年度は一転、履修者が0となってしまった。プロジェクト存亡の危機と思われたが、翌2015年度には、初めてデザイン学課程から2名が履修してくれ、その結果、それまでは音楽療法ベースだったのに対して初めて造形芸術的要素を取り入れたセッションを行うことができた²⁾。

2016年度も、デザイン学課程から2名が履修してくれ、また別の造形芸術的要素を取り入れたセッションを行うことができたので、まず、これについて報告する。

1. 夏期集中授業「人間学2」

今回の履修者も、前年度同様、デザイン学課程の女子2名のみだったので、同じくデザイン学課程の渡辺の指導の下、造形芸術中心の芸術療法プログラムを考えてもらうことにした。そして、今までと同様、2人で1つの芸術療法チームを組み、集中授業の枠内で計画、準備、練習した上で、外部のクライアントに対して実際に集団芸術療法セッションを実施する、という

受理日2017年11月22日

*1 教養学部芸術学科音楽学課程教授 *2 教養学部芸術学科音楽学課程准教授

*3 教養学部人間環境学科社会環境課程教授 *4 教養学部芸術学科デザイン学課程教授

授業計画を立てた。

6月29日	1コマ	初顔合せと方針・日程決め	全員
9月5日	4コマ	音楽療法見学（ぬくもりの家）	近藤
9月6日	3コマ	芸術療法セッション準備（1）	渡辺
	1コマ	芸術療法セッション準備（2）	堀
	1コマ	芸術療法セッション準備（3）	沖野
9月7日	5コマ	本番（南コミュニティセンター）と反省会	全員（除く磯部）
（計15コマ）			

まず、電子メールとLINEによる日程調整の結果、例年同様6月、初顔合わせと今後の方針・日程決めのために全担当教員と履修生に集ってもらい、一度の会合で全日程を決めた。

夏期集中講義期間の9月5日、大学の近くにある介護老人保健施設《ぬくもりの家》にて、近藤が音楽学課程において指導している音楽療法セッション実習を、芸術療法の範例として本科目履修生に見学してもらった。内容は1日掛りで、近藤による事前レクチャーから始まり、セッションの見学、そして最後に振り返りと芸術療法セッションへの助言で終わった。

この経験を踏まえ、翌2日、やはり1日掛りで、履修生にセッションの準備を自主的にしてもらった。その間、渡辺中心にサポートし、後に堀と沖野も加わった³⁾。

そして9月3日、いよいよセッション本番を迎える。場所は伊勢原市の南コミュニティセンター、対象は同市の社会福祉協議会の主催するミニサロン「原之宿あじさいクラブ」⁴⁾に集う高齢者約40名である。当日は、セッション開始が13時30分の予定であったので、1限開始時の9時20分全員集合、余裕をもって最終準備、午後から学用車を借りて機材を運搬した。そしてセッション本番中は、担当教員も全員スタッフとして参加し、学生チームのサポートおよびカメラやビデオによる記録等を行った。

さて、彼女たちが考え出してくれたプログラムのメインは、トートバッグ作りであった。まず、自己紹介を兼ねて我々セラピスト側が一人一人好きな花の名を挙げていった後、第1段階は柄選びである。前日準備で彼女たちは、無地のトートバッグに6種類の花の下絵を描いたものを必要枚数用意していた（図1）。その中からクライアントに1つずつ選んでもらった。

第2段階は色塗りである。布用クレヨンを用意し、各自好きなように色塗りしてもらう。要は塗り絵であるが、早く終わるかと思いきや、技法的にも単色塗りだけでなく重ね塗り等、けっこう芸術的に描き込む人が多く、予想より時間がかかった（図2）。

第3段階はアイロン掛け。加熱処理によってクレヨンが定着し、洗濯しても色落ちしにくくなる。この工程は我々スタッフが作業し、その間クライアントには待機してもらった。色塗りが終わったものから順次アイロン掛けをしていったが、上述のように色塗りに凝る人が多かったため、後の方に作業が集中した。そのためクライアントの待ち時間が長くなったので、最後に予定していた合唱を、臨機応変にこの間実施した。近藤のキーボード伴奏に合わせて、模造紙に書かれた歌詞を見てもらいながら、《上を向いて歩こう》、（花の連想で）《秋桜》、《明日が



図1 無地のトートバッグに予め描かれた下絵のサンプル



図2 完成したトートバッグ

あるさ》の3曲を、全員で合唱した。

そして最後に、クライアントの皆さんに各自の完成トートバッグを高く掲げてもらい、お花畑のような集合写真を撮って、記念とした(図3)。トートバッグは、皆さんに喜んでお持ち帰りいただいたことは言うまでもない。

大学に戻っての反省会では、ビデオを再生しながら自由にディスカッションした。反省点としては、柄を選んでもらう際多少混乱が見られたので、前年のようにセラピスト側が配る方がよいのではないかというのが1点、また、前年の反省からアイロンは複数台用意したいところであったが、準備と本番の日程が連続していたという特殊性から、結局また1台しか用意できなかった。その結果再びクライアント側に待機を強いることになるところだったが、合唱の順番を繰り返すことで対処できたと考える。

なお、最後の集合お花畑では、実は写真を撮った人以外は本物を見ていないという指摘も出された。記念写真もさることながら、やはり皆で仕上げた成果をその場で鑑賞してもらう工夫が欲しいところであった。

前年のプラ板に比べて良かった点としては、同じ色塗りでも今回の方が十分な大きさがあり、高齢者には適していたこと、プラ板という高齢者にとって新奇なものも意義あるかもしれない



図3 完成トートバッグのお花畑

が、今回「クレヨンなんて久しぶり！」という声がけっこう聞かれ、回想法的な効果もあったと考えられること等が指摘された。

最後に、学生の感想として、年代の違う大人数を相手にしたこのような試みは初めてのことであり、コミュニケーションの難しさを改めて知ったが、今回の経験が、話の苦手な人へのコミュニケーションのきっかけ・手段になるかもしれない、という前向きな意見が聞かれた。

次に、秋学期に開講された「人間学1」について報告する。

2. 秋学期講義「人間学1」

授業計画は2016年度も、直近の3年間と同様⁵⁾、「概論→制度論→実践論」という理想的な流れから「概論→(実践論)→制度論→(実践論)」とせざるをえなかった。さらに当年度は、「はじめに」で触れたように)開講時から前年度まで吉川教授に担当してもらってきた箱庭療法実習を今後どうするかという問題に突き当たったが、諸般の事情により今後は後任をとらず、代わりに、担当教員の中で唯一2コマのみ担当であった磯部がもう1コマ増やすこととし、これによって担当教員全員が等しく3コマずつ担当という授業構成となった。

9月28日	ガイダンス	沖野
10月5, 12日	芸術療法概論(1)(2)	磯部
10月19日	〃 〃 (3)と小レポート(1)	〃
10月26日, 11月9日	造形芸術の臨床的応用(1)(2)	渡辺
11月16日	〃 〃 (3)と小レポート(2)	〃
11月23, 30日	医療と福祉の制度(1)(2)	堀
12月7日	〃 〃 (3)と小レポート(3)	〃
12月14, 21日	音楽療法(1)(2)	近藤
1月11日	音楽療法(3)と小レポート(4)	近藤
1月18日	まとめと人間学2へのガイダンス	沖野
1月25日	課題テーマに対するレポート	〃

成績は、例年と同様、主として4回の小レポートと最後の「課題テーマに対するレポート」を基につけられた。小レポートの課題は、それぞれ、芸術療法の歴史と概要に関する講義のまとめ、「写真撮影行為による外界の理解—私の Topos」をテーマに1枚の写真プリントの提出、芸術療法に公的保険を適用すべきかどうか、音楽を使って療法をする意味と可能性、であった。最終レポートの課題テーマは、「具体的な対象者を想定した上で、そこで実施する芸術療法セッション計画を、具体的に考えなさい」であった。

履修者による授業についてのアンケートの中で、総合評価の本科目平均値は、前々々々回から3.97→4.24→4.27→4.34と順調に上がって来ていたが、残念ながら今回4.29と、僅か0.05であるが前年度より下がった。例年評判の良かった箱庭療法実習がなくなった影響があるのかもしれない。それにも拘らず、前々年度よりは上ということは、各教員それなりの努力を評価したい。

教員による成績評価の平均 GPA は、「／」評価（授業放棄者等）を除いて、前々々々回から2.53（49名）→2.59（22名）→2.35（26名）→2.35（34名）と相対的に低レベルでの横這いであったが、今回は3.04（24名）と、初めて3の大台（成績評価でいうとA相当）に乗った。履修者数は再び20名台に減ったが、勤勉な学生が集まってくれた可能性もあろう。

注

- 1) プロジェクトそのものの趣旨は、東海大学教養学部のサイトにある (<http://www.shc.u-tokai.ac.jp/prj/> 医療・福祉における芸術療法プロジェクト-2/, 2017/11/22 確認)。
- 2) ここまでの経緯については、今までの報告書を参照のこと。沖野成紀、磯部二郎、近藤真由、堀真奈美、渡辺哲生「SOHUM『医療・福祉における芸術療法』プロジェクト」（『東海大学紀要—教養学部』45 輯，2014 年，423-426 頁），同「医療・福祉における芸術療法プロジェクト」（『東海大学紀要—教養学部』46 輯，2015 年，295-297 頁），同「医療・福祉における芸術療法プロジェクト」（『東海大学紀要—教養学部』47 輯，2016 年，381-385 頁）。
- 3) なお、今回は初めて見学・準備・本番が 3 日連続の日程となり、たまたまこの 3 日間出張が入っていたため、磯部は最初のミーティングのみの参加となった。
- 4) 神奈川県伊勢原市のサイトを参照のこと (<http://www.city.isehara.kanagawa.jp/docs/2014040200069/>, 2017/11/22 確認)。
- 5) 沖野他、前掲書を参照のこと。